

---

# こんにちは。シリーズ壱

獄俄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こんにちは。シリーズ巻

### 【Nコード】

N0462A

### 【作者名】

獄俄

### 【あらすじ】

これはあることをきっかけに、人を殺してしまった少年達が人を殺すことに快感を覚え次々と人を殺していくお話です。

## 薔薇（前書き）

この小説の内容は始めはあまりグロテスクでは無いのですがじよじよにグロテスクにしていく予定です。あまりそう言ったものが好みでは無い方は体の健康のため途中で止めてください。

## 薔薇

偶然だった。

僕達がその場所にいたのも、あいつがああ場所にいたのも。

今日、僕達は人を殺した。

「それじゃあ、僕そろそろ行くから。」

「そう、いつてらっしやい。」

僕には、母親しか居ない。

父親は一ヶ月前に事故で死んだ。

始めは信じられなかったけど父親の死体を見て実感した。

母親は泣いていた。

僕は自分の父親が死んだというのに不意にも死んだ父親を見て綺麗だと思った。

その日から、僕は死体に興味を持つようになってしまった。

「おはよう、相間。」

「昂。」

昂は小学校から同じクラスで言わば幼馴染と行ったところだ。

こんな根暗の僕に、誰も話かけないと思っていたのに昂だけは違っていた。

「お前は、今回のテストも学年トップなんだな。」

「昂はいつものように50位内に入ってないんだね。」

「・・・嫌味か？」

「別に。」

ずっと前、昂に学年で一番頭が良いから僕に話し掛けてくるのか？と聞いた事があった。

もちろん僕はそうなんだと思っていたのに昂から帰ってきた言葉は違っていた。

「ねえ。中1の頃僕が昴に質問した時何て答えたか覚てる？」

「さあ？」

「昴は僕に、同じ匂いがするからって言った。」

「そういえばそうだったな。」

「どんな匂いだったの？」

「殺人者の匂い。」

そう僕等は似たもの同士、話を通じる。

だから一緒に居る。

それ以上理由は、要らない。

必要ない。

そろそろチャイムが鳴る頃なので僕達は急いで教室に入った。

なんとか間にあっただけ、僕は数学の宿題をやっていない事に気が付いた。

数学は5時間目まだ間にあつ。

めんどくさいので写そうと思っただけと僕には見せると頼める相手が居なかった。

昴は当然やっていないだろうし、皆話した事のない奴ばかりだから頼めるはずがない。

自分でやるのはめんどろだけと頼める相手が居なかったのですからなくやるうとしていた時に、隣の席の支流が、僕の肩を叩いた。

「神谷君。ボクので良かったら写す？」

「……どうも。」

「5時間目が始まる前に返してくれば良いから。」

支流は話が終わるとすぐさま何処かへ行ってしまった。

あいつは、見た感じでは女みたいで僕が始めて見た時は違和感があった。

名前も咲良とか言う名前ですっきり女だと思っていたから余計にそうだった。

僕は、休み時間昴と一緒に支流の宿題を写し、ちゃんと3時間目の終わり頃に返した。

おかげで先生に怒られずにはすんだが支流に一つ借りができてしまった。

あまりそういうのはしたくないが先生に色々言われて休み時間まで削られる説教はごめんだった。

帰る時間になって珍しく昴が僕にコンビニに付き合っただけと言いつつ出したので、僕はノートを昴は雑誌を買う事にした。

「昴って雑誌とか読むんだね。」

「たまにな。」

全然知らなかった。

今まで僕は雑誌を買ったことは無かった。

それが面白そうにも見えなかったし教室で女子がアイドル雑誌を見てきゃーきゃー言っているのを耳障りだと思っていたからどっちかって言うと嫌いな方だった。

でも別に雑誌を読んでいるからといって昴を嫌いになる事はなかった。

むしろ隣で雑誌を立ち読みしている昴の姿は結構かつこ良かった。

僕達は、レジに並び商品を買って家に帰ろうとした時に走ってきた人がカメラを落として行ったので僕達は教えてあげようと思いきやカメラを拾って前の人を追っかけていった。

近くの神社まで行った時僕達は誰かに手を捕まれたので振り向くとコンビニの店員らしき服を着た男の人が立っていたのを見て僕は今の状況が一瞬にして理解できた。

「その中学生その商品万引きしただろう！他の商品は何処だ！」

「俺たちじゃないです。」

「嘘をつくな！私を見ていたんだ！」

「この人ちゃんと話を聞く気がないな。」

「逃げちやう？」

「さすが学年トップ解ってますね。」

「じゃあ123で階段駆け上るよ。」

「了解。」

「なにこそ話しているんだ！店まで来てもらおうか？」

相手が手を捕まえようとした時に逃げるんだ。

今はまだ早い。もう少し。

「聞いているのか！」

今だ。

(123行くよ！)

「こら！待て！」

僕達は、必死で階段を駆け上った。

途中でこけそうになったけどココで捕まるわけにはいかない。

逃げなきゃ。

「相間！後ろ！」

僕がその声に反応した時にはもう遅かった。

男の人が僕の汗でぐっしよりの手を痛いほど握りしめていた。

「もう追いかけっことは終わりだ。」

僕は必死にその手を振りほどこうとした時僕の手がほどけ男の人の悲鳴がしたあとすごい物音がした。

下を見ると血まみれの道路の上に見たことのある男の人が倒れていました。

僕はそれを見てまるで薔薇に囲まれた男の人のように見えた。

まるで綺麗な光景が繰り広げられているかのように思えた。

## 薔薇（後書き）

こんなつまらない小説を、最後まで読んでいただき本当に有難うございました。

感想など教えてくだされば嬉しいです。

近いうちに続きを書いていきたいと思っておりますのでそちらの方もよろしく願います。

獄俄

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0462a/>

---

こんにちは。シリーズ壱

2010年10月28日07時28分発行